

—学会記 II—

第6回日本臨床麻酔学会総会を主催して

塩澤 茂

去る11月6～8日の3日間、仙台市の市民会館と県民会館で第6回日本臨床麻酔学会総会を主催致しました。仙台で麻酔科の学会が開かれたのは、昭和36年、当時の東北大学麻酔科教授の岩月賢一先生が第8回日本麻酔学会総会を開かれて以来実に25年ぶりのことです。本学会は小坂二度見教授（岡山大、麻酔科）が始められてから、大学病院と一般病院とが交互に主催するというユニークな形をとり続けており、日本麻酔学会が主として麻酔の基礎的研究、動物実験などを含めた麻酔の研究面を重視しているのに対して、本学会は麻酔の実際的、臨床的な面に主点がおかれている全国的規模の学会で、現在会員数は3,000名を越えています。現在まで一般病院で担当した病院は、関東通信病院と大阪厚生年金病院のみで、当院もこれらの病院に匹敵する全国一流の病院と認められた訳で、大変名誉なことと思っております。

幸い総会は3日間とも好天に恵まれ、秋深き仙台の紅葉した樺並木を渡る風もさわやかに、出席者は約1,400名を数え、一般演題も口演、示説併せて467題という発会以来最高の演題数にのぼり、盛会裡に終わりました。以下にこの学会の主な演題について御紹介したいと思います。

わが国の麻酔は、手術室の麻酔、集中治療（ICU）、ペインクリニックを三本柱として発展してきていますが、今回の総会のプログラムの編成に当たってもこのことを基調としました。特別講演4題、教育講演9題、シンポジウム3題を行いました。また外国からは、米国からW.C. Stevens教授、P.L. Goldiner教授、W. New教授の3人を招聘しました。いずれの方も初来日で、米国麻酔科の第一線で活躍されている新進気鋭の教授です。このほか、中国から教授、準教授を含め4人の麻

酔科医と1人の通訳の方が見学のため訪れられました。

現在、吸入麻酔薬—イソフルレン、セボフルレンが新しいハロゲン化炭化水素の麻酔薬として登場してきました。Stevens教授のイソフルレンとハロセン、エンフルレンとの比較検討の特別講演と、池田和之教授（浜松医大、麻酔科）のセボフルレンの教育講演はこの意味で注目されました。特にセボフルレンは臨床的研究において、わが国が世界に一步リードしており、Stevens教授も熱心に池田教授の講演を聴いておられました。

高頻度人工呼吸は現在HFJV（高頻度ジェット換気）として臨床に用いられておりますが、Goldiner教授がこの今日的意義について講演されました。

人工呼吸では病的肺を対象に種々の換気モードが提唱されていますが、沼田克雄教授（横浜市大、麻酔科）司会のシンポジウム「人工呼吸の適応と換気モードの選択」では各換気モードの適応、利点と欠点などが討議され、好評でありました。

しかし、重症患者の呼吸管理では人工呼吸器は限界にきており、膜型人工肺が再び注目されてきました。森岡享教授（熊本大、麻酔科）は膜型人工肺による呼吸管理の研究をライフワークとされており、多年の成果を特別講演されました。未だ一般の人工呼吸器にとって替る程の十分な成果は収められているとはいえない状態ではありましたが、もしもこれが成功すると、気管内チューブも麻酔器も不要な麻酔も可能となり、革命的な事態が到来する訳で、その研究は注目すべきものと思われました。

循環では清水禮壽教授（自治医大、麻酔科）司会のシンポジウム「心機能の評価」が行われまし

た。心機能の評価には種々の方法が用いられており、各シンポジスト間で熱心に討議されました。開心術の麻酔、心疾患々者の麻酔が年々増加しつつある今日、この問題は今後も深く検討されるべき問題であります。

癌性疼痛は疼痛のなかでも特に激烈で、その対策が急がれています。藤田達士教授（群馬大、麻酔科）司会のシンポジウム「癌性疼痛のアプローチ」では広く、精神科医、脳神経外科医、放射線科医、麻酔科医など広義のペインクリニックの立場から討議されました。私は時間の関係上出席出来ませんでした。出席した人々の話では、このシンポジウムの成果は今一つという声がありました。しかし、従来麻酔科関係の学会では癌性疼痛が麻酔科医の神経ブロックの立場からのみとりあげられていたことを考えると、こうした多くの立場の人々からの発言と討議の試みは有意義であったと思います。

救急蘇生や集中治療の場で、麻酔科医にも脳死、臓器移植、尊厳死などの問題がふりかかってまいりました。われわれはこれらの問題をふまえて、もう一度麻酔について問いなおしてみる必要があると思われまます。岩月賢一名誉教授は私の恩師であります。「麻酔科医はいかにあるべきか」と題する特別講演をされ、この問題についての哲学的見解を述べられました。その見解には反論も多いことと思われまますが、「麻酔科医はいかにあるべきか」

の問題は、「人間はいかにあるべきか」に帰するといふ先生の結論には異論はなかったと思われまました。

折角の仙台での学会ですので、医師のみならず、看護婦などのコメディカルな方々にもと思い、古橋正吉教授（東京医科歯科大、手術部）に「手術部、ICUにおける感染防止対策」と題して教育講演をお願い致しました。土曜日の午前中にもかかわらず、多数の看護婦達が医師と共に聴講しておられ、古橋先生の明解な御講演と相まって多大の成果をあげ得たと信じまます。

このほかにも多くの優れた教育講演、一般演題がありますが、私面の都合上割愛させて戴きまます。

思うに、私がこのようなマンモス学会を主催することが出来まましたのは、私の片腕となって働いて戴いた筆田廣登先生、事務一切をひき受けて戴いた大坂充子さん、当麻酔科の医局員の皆様、そして全面的にバックアップして戴いた東北大学麻酔科の皆様、また何かにつけて協力して戴いた当院手術室、ICUの看護婦の皆様、事務局の皆様などによるものと思われまます。紙面を借りて、厚く御礼申し上げます。最後に、臨床と研究は車の両輪であると思われまます。今回の学会を主催してみて、病院の健全な経済的基盤を確立することも大切であるが、われわれは日常診療に従事するなかに於て教育と研究にもますます力を入れて行かなければならないと感じまました。